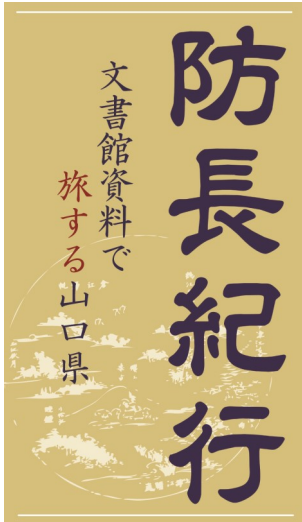


門 正 (社会式温泉湯田)

湯田温泉株式会社正門（雨村家文書306）



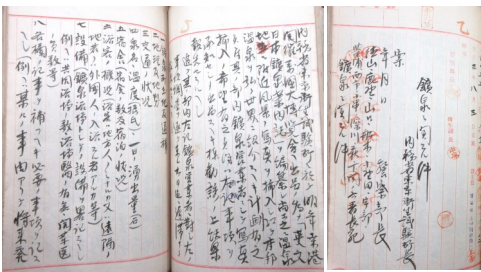
## 大正～昭和初期の湯田温泉(1)

鉄道をはじめとする交通網の発達に伴い、とりわけ大正期以降、温泉を訪れる人々の数は増加傾向を辿りました。これに伴い、湯治の場であると共に、観光地としての性格も顕著な温泉の姿が見られるようになりました。大正2年(1913)の山口線開通を追い風に入浴客数の増加をみた湯田温泉(山口市)も、そのひとつといえます。

### 《The mineral springs of Japanと湯田温泉》

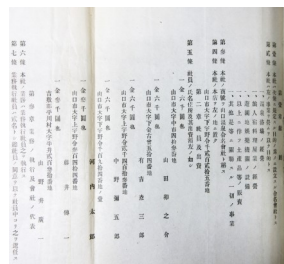
大正4年に内務省東京試験所(担当は技官の石津利作)が出版した“The mineral springs of Japan”は、同年にサンフランシスコ(アメリカ)で開催されたパナマ太平洋万国博覧会に出品するため、国内の主要な温泉の情報(泉温・湧出量・放射能など成分の分析結果・入浴客数・滞在日数など)を英文で纏めたものです。山口県内では、湯田・川棚・深川・俵山の各温泉が掲載されています。

当館所蔵の「鉱泉一件」(県庁戦前B1412)からは、大正3年に同試験所の依頼を受けた県が、「本邦温泉ヲ弘ク世界ニ紹介」という趣旨に基づき、温泉所在地の警察署を通じて進めた調査の様子が窺えます。回答した松田温泉旅館は、湯田温泉のアクセスの良さ(吉敷郡ノ南部小郡町ヨリ島根県ニ通スル国道線ニ沿ヒ、又山陽鉄道山口支線ニ沿ヒテ此村ノ一



▲県警察部長から各署長宛の調査指示文書  
(「鉱泉一件」県庁戦前B1412)

「桑港開催万国大博覧会へ出品ノ為」英文日本鉱泉案内誌」ヲ編纂シ」と調査主旨を述べ、①鉱泉所在地及通称、②地理及地勢、③交通の状況、④泉名・温度(摂氏)・一日の湧出量(石)などの調査項目が挙げられています。



山口温泉合名会社  
定款  
(県庁戦前B1413  
「鉱泉一件」)

昭和7年に湯田温泉株式会社から経営を譲渡された山口温泉合名会社の定款です(文書右端にある「山口温泉合名会社定款」の文字が簿冊に綴じこまれているため上の写真には写っていません)。事業として「温泉浴場ノ経営」の他に「遊園地娯楽機関ノ設備」も挙げられています。

端二湯田駅アリ、温泉所在地へ此駅ヲ距ツルコト十町ナリ）や、高い泉温・豊富な湧出量（食塩泉ニシテ其温度八四時一定セス、平均冬季ニ在リテ五十二度、夏時ニ在リテ八十五度ニシテ、而シテ全温泉地下丈余ノ処ヨリ汲ミ取ルモノニシテ湧出量ヲ量リ知ルヘカラス、而シテ四時共湧出量ヲ減少セス所謂其量ハ無尽蔵ナリ）をアピールしています。

《「西の宝塚」としての湯田温泉》

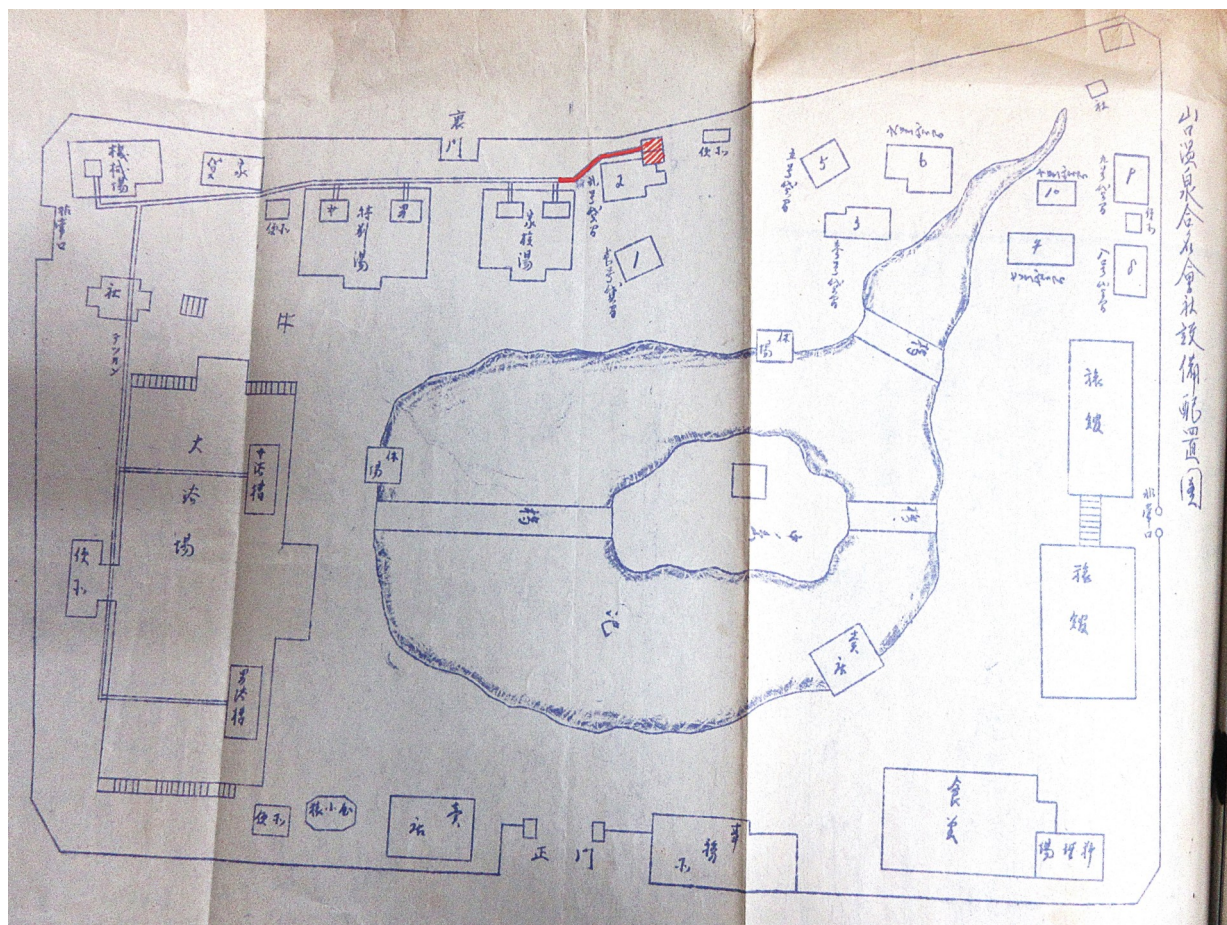
大正期に箕面有馬電気軌道（阪急電鉄の前身）が整備した新宝塚温泉（兵庫県）は、レジャー施設と一体型の温泉地として注目を集めていました。これになぞらえ、国内のみならず、海外からも多くの人々が訪れた湯田温泉は、「西の宝塚」とも称されていました（『防長新聞』昭和16年6月10日付、解説シートNo.28も参照）。その象徴的な存在が、湯田温泉株式会社経営（昭和7年から山口温泉合名会社に譲渡）の山口温泉ホテルです。当館では、同ホテル内に設けられた大浴場（千人湯）や美しい庭園、食堂、撞球場、温泉神社などの様子を伝える絵葉書を多く所蔵しています。



▲湯田温泉絵はがき 湯田温泉株式会社大浴場全景（雨村家文書306-2）



▲湯田温泉絵はがき 湯田温泉株式会社大浴場内浴槽（雨村家文書306-3）



▲山口温泉合名会社（山口温泉ホテル）設備配置図（「鉱泉一件」県庁戦前B1414）